

令和5年度

孤独・孤立対策官民連携プラットフォーム

＜関連イベント＞ 議事録

（開催要領）

1. 開催日時：令和6年3月19日（火）15:00～17:00
2. 場 所： 総会終了後、オンライン開催
3. 出席者：

＜事務局＞

（進 行）	大西 連	内閣官房孤独・孤立対策担当室政策参与
	山本 麻里	内閣官房孤独・孤立対策担当室長
	江浪 武志	内閣官房孤独・孤立対策担当室次長
	澤瀬 正明	内閣官房孤独・孤立対策担当室参事官
	松木 秀彰	内閣官房孤独・孤立対策担当室参事官
（進行補佐）	荒川 裕美	内閣官房孤独・孤立対策担当室参事官補佐
	青野 恵里子	内閣官房孤独・孤立対策担当室参事官補佐
	山村 吾郎	内閣官房孤独・孤立対策担当室主査
	黒瀬 啓介	内閣官房孤独・孤立対策担当室主査付

※このほか、会員団体と自治体がオンラインで参加。

（議事次第）

1. 開会
2. パネルディスカッション
 - (1) 事例紹介
 - ① 孤独・孤立対策強化月間に関連した0次予防等の取組み事例
(一般財団法人100万人のクラシックライブ、一般社団法人ArtsAlive)
 - ② 「孤独・孤立対策に資する官民・民民連携による特色ある取組の推進」事例
(NPO法人クラブしっきーず)
 - ③ 企業における孤独・孤立対策の取組み事例
(イオンリテール株式会社)
 - (2) 意見交換
 - (3) 月間関連告知、まとめ
3. 閉会

○荒川参事官補佐

お時間となりましたので、これより孤独・孤立対策官民連携プラットフォーム 令和5年度通常総会関連イベントを始めさせていただきます。本日は、お忙しい中ご参加いただきありがとうございます。改めまして、先ほどの通常総会と同様に司会を務めさせていただきます、内閣官房孤独・孤立対策担当室の荒川と申します。よろしくお願い申し上げます。

本日は、「孤独・孤立対策としてのつながりづくり」として、令和5年度の官民連携プラットフォームの活動と関連して、多様な主体による0次予防や企業等の孤独・孤立対策の取組を紹介しつつ、パネルディスカッションを行います。会員のみなさまが様々な取組を知る機会となるとともに、今後の連携の参考としていただければと思っております。

では、早速ですが内容に入らせていただきます。以後の進行はモデレーターの大西連政策参与にお願いしたいと思いますので、それでは、大西参与よりお願いいたします。

○大西政策参与

よろしくお願い致します。政策参与の大西連です。早速ですが、15時から17時までの2時間、孤独・孤立対策としてのつながり作りということで、通常総会関連イベントを始めてまいりたいと思います。

最初に今回のイベント全体の流れをご説明させていただきます。大体120分ありまして、登壇・事例紹介される方が4団体、それからパネリストとして2名の方に来ていただいております。

事例紹介していただくのが、一般財団法人 100万人のクラシックライブ 代表理事の養田さん、一般社団法人 ArtsAlive 代表理事の林さん、それからNPO法人 クラブしっきーず クラブマネージャーの増田さん、イオンリテール株式会社 経営企画本部 MySCUE 事業部長 駒井さんの4名の方に事例紹介していただきます。

それからパネリストとして、認定NPO法人 全国こども食堂支援センターむすびえ 理事長の湯浅誠さん、内閣官房孤独・孤立対策担当室の山本室長にご登壇いただき、私含めて7名で進行を進めていきますが、最初に事例紹介の4団体の方からそれぞれご発表いただいて、パネリストとして湯浅さん・山本さんからもコメントをいただくという形で考えております。

後半はお題を二つ考えてきておりまして、それに基づいてディスカッションをするということで考えております。その前に、私の方から今年5月の孤独・孤立対策強化月間について簡単にご説明させていただきます。

孤独・孤立対策強化月間の内容について簡単にご説明させていただきますと、現在4つを大きく予定しております。一つ目はポスターの作成と配送、二つ目は専用Webページの開設、三つ目は「孤独・孤立対策強化月間」の取組の登録・紹介、NPO等の紹介動画の作成・紹介、それから四つ目、最後はメタバース空間を用いたイベントの実施ということの内容になっておりますが、一つずつ簡潔にご紹介します。

まずポスターの作成と配送ということですが、こちらのビジュアルを既にご覧になられている方もいらっしゃるかもしれませんが、「孤独・孤立対策強化月間」啓発ポスターを会員各団体宛に順次配送させていただきます。強化月間のロゴマークと合わせてぜひ周知・広報にご活用いただければと思っております。ご希望に応じて、ポスターの電子データ等もご提供可能ですので、遠慮なくおっしゃっていただければと思います。

二つ目は、専用Webページの開設ということで、「孤独・孤立対策強化月間」の専用ホームページを作成・開設いたします。ホームページはキャラクターとともに活動紹介のマンガや動画、登録いただいた強化月間中の各取組等を紹介させていただきます。取組登録は引き続き募集中ですので、ぜひ皆さん、各団体での取組の登録をお待ちしております。

キャラクターが右にありますが、ヒカリノという孤独・孤立に寄り添う光の妖精ということで、どうやら宇宙から来たという設定があるそうです。後でぜひ設定を読んでいただけたらと思いますが、こういったキャラクターを作って広報・啓発をしていくというところで現在進んでいるところでございます。

三つ目は、強化月間の取組の登録・紹介、NPO等の紹介動画の作成・紹介。会員および各団体自治体に「孤独・孤立対策強化月間」中の取組（活動、周知、広報等）について、登録を募集しております。現在も募集中でございます。

取組については先ほどご紹介したホームページ上でデザイン化をし、ご紹介させていただきます。またNPO等の活動紹介動画も、先ほどのホームページ上で紹介させていただきます。右下に写っていますのは、一般社団法人えんがお様をご紹介されているものですが、栃木にある団体で、様々な居場所の活動をやっていたりするところですが、マンガや動画等でのご紹介を一部行っているということです。

四つ目が、メタバース空間を用いたイベントの実施ということで、その他メタバース空間を用いた孤独・孤立対策の周知・啓発および当事者等の相談等を目的とした下記のイベント等を企画して、孤独・孤立対策強化月間中に実施することを現在調整しております。

①から⑦までありますが、つながりサポーターは現在試行的な事業として行っており、参加者向けにメタバース上でつながりサポーター養成講座をウェビナー形式の講座を開くということが一つ目。二つ目はNPO向けのファンドレイジング講座、これもメタバース上でウェビナー形式の講座を開くということを進め準備しております。それから相談窓口、これは5月2日から7日の限定開催ということで現在想定し準備しております。それから様々な自治体やNPO等からご登録いただいたそれぞれの取組についてご紹介するようなコーナー・企画ということも考えているほか、孤独・孤立対策ウェブサイト「あなたはひとりじゃない」に搭載しているチャットボットにメタバース上からもアクセスできるようにということで準備を進めているところです。六つ目はNPO等紹介動画ということで先ほどと重なるところがありますが、NPO等を紹介する動画をメタバース上でも視聴できるようにすること。それからポスター、これもメタバース上に展示するというので、このように四つの観点でこの孤独・孤立対策強化月間の取組というものを進めていく予定でございます。ぜひ各団体の皆さんの取組の登録であるとか、それから啓発・周知含めて、ご協力いただけたらと思っております。

政府の取組をご紹介させていただきましたが、ここからは今日ご登壇いただく皆様の事例紹介ということで4団体にそれぞれご発表いただければと思います。まず2団体にご紹介いただいて、そのあと政府の取組紹介がまたあり、次に2団体ということでございます。

最初は100万人のクラシックライブの代表理事 蓑田さんにご紹介いただければと思っておりますが、お名前の通り音楽を通じてつながりを作っていくという取組だと伺っております。ではご発表をよろしくお願いいたします。

○一般財団法人 100万人のクラシックライブ 蓑田氏

ありがとうございます。それでは私どもの100万人のクラシックライブの取組について少しご紹介をさせていただきます。

私どもの活動が目指すところは本当に単純で、日常に音楽があふれる街を作ろうということであり、そのためには音楽を鳴らす場所がなくてははいけませんので、人と人が繋がる場を作ることというのが活動の一つの目的になります。もう一つは、もちろん我々だけでできることではないので、みんなと一緒にというのが活動のテーマになっています。

次です。これが2023年の我々の活動の実績ですが、我々の活動はクラシックのミニコンサートを全国でやるということでございまして、去年は全国で912回のコンサートを行いまして、延べ8万7000人強の方々に我々のコンサートに来ていただいたということでございます。

先ほど申し上げましたようにみんなでやるということで、財団は様々な方々と一緒にこのコンサートをやっております。その下にあるアレンジャーと書いてありますが、イオンモールさんを先頭にたくさん名前が書いてありますが、これらの方々の皆さんは我々と一緒にコンサートをやっている主催者の方でございまして、黄色で網掛けをしているところは、公・自治体であったり、あるいはその自治体の関連団体であったりという方々が一緒にやっているといただいているということでございます。

では、どんなやり方をやっているのかというと、三つほどパターンがございまして、一つはクローズドなコミュニティと書いてありますけれども、地域とか何とかの集まりとか、そういうところに持って行ってコンサートをやるということ。もう一つは全く逆で、駅やショッピングモール、空港、お寺等オープンな場でコンサートをやるという形でございます。三つ目は、これは我々がある程度社会的な意味を持たせなくてはいけないということで、いまはターゲットを絞ったプロジェクトと書いてありますが、具体的には「子どもたちに『音楽を届ける』プロジェクト」というプロジェクトをやっております。

これはこどもたち、特に困難な状況にあるこどもたちにコンサートを無料で届けているという活動であります。動画を見ていただいて活動の状況をご紹介したいと思います。

(動画「一般財団法人 100 万人のクラシックライブ」)

ご覧いただきましたように、非常に身近で音楽をみんなに聞いてもらうということで感動を共有しようと、そしてみんながつながる場作りをしようということでいままでやってきて8年、9年目に入っております。

最後にこの活動を始めた意味ですけれども、実は私は1990年代に勤務の関係でロンドンにありまして、バブルがはじけた日本を外から見ておりました。そこで目にしていたのは、明らかに日本の社会が崩れていっている姿、コミュニティの弱体化、個人の孤立化というのがもう90年代の後半から始まっていたと認識しておりました。

一方で、日本の人は変わったのかというと、実は物理的な人と人とのつながりを本当に切りたいわけではなくて、本当はつながっていたいという気持ちが非常に強い。これは欧米人よりも遥かに日本人の方がその傾向が強いと私は思っていました。

そういう中で言うと、もともと日本は非常にコミュニティが強い国でしたので、コミュニティを強化するための自動的なシステムというのは組み込まれておりません。崩れてしまうとどうやってコミュニティをもう一度強くしたらいいかということはよくわからないということがありましたから、これは意識的に作らなくてはいけないのだろうという思いで2000年の頃からいろいろと考えて人と人が出会って感動を共有して、そして人がつながる場作りをしなければならないということでこれを始めました。

特にデジタル化が進む社会だからこそ、このアナログのクラシックが一番私がいいと思いますが、生の演奏がもたらす普遍的な感動というのは大変大切で、それが人と人をつなぐ場になるんだろうと信じてやっております。

最後に、我々の活動自体をご理解いただくときに、私どもの活動は生の演奏をとにかく手軽にお手元にお届けできる機能、すなわち社会的なインフラの一種だというふうにお考えいただければよろしいかと思います。

我々が何かを解決できるというよりは、人と人をつなぐ生の演奏を気楽にお届けできるということで、社会の様々な場面でこれを取り入れて活用していただきたい。孤独・孤立というのは非常に大きな日本におけるテーマで、我々が向き合っている正面のテーマでもあります。しかし人々を取り巻く様々なこの問題というのは、また孤独・孤立になってしまう所以というのはたくさんあるわけで、

そこにいろんなものを書いてありますけども、そういうものをどんどん私どもと一緒にこういう活動によりいろいろ課題に直面している方々に我々の活動を使っていただければ、ソリューションになるのではないかと考えております。100 万人のクラシックライブのご紹介は以上でございます。

○大西政策参与

ありがとうございました。途中、動画の再生が手間取り申し訳ありません。回線によってはカクカクしてしまった可能性があり、失礼いたしました。

昨年の 2023 年のライブ数は 912 回で参加人数が 8 万 7551 人ということで、本当にたくさんの方に音楽を通じたつながりというのをお届けになられているのかなと思いましたし、動画でもお寺でクラシックをやったり、名前を言っているのかかわらないけれども、鬼を倒すアニメの主題歌でこどもと一緒に楽しめるとか、すごくいいですね。

先月、北海道庁さん主催の孤独・孤立のイベントがあつて、イオンモールでまさにユーチューバーのピアニストの方とトークライブをするということで、まさにこのピアノの音で皆さん立ち止まって、孤独・孤立に関心を持ってくれたということで、まず音楽っていうのは一つのキーワードになるのかなということだと思います。蓑田さん、ありがとうございます。後半もよろしくお願いいたします。

続きまして、お二方目をご紹介させていただければと思います。一般社団法人 ArtsAlive 代表理事の林さんです。音楽の次はアートということで、ぜひ林さんにご発表いただければというふうに思っております。よろしくお願いいたします。

(動画開始「一般社団法人 ArtsAlive」※以下、「動画終了」までは動画内の発言)

○一般社団法人 ArtsAlive 林氏

私は 1999 年より日本の高齢者施設において、アーティストや美大生と一緒にアート創作をするという活動をしていました。それをずっとやっていた中で、やはり認知症というものがキーワードとして出てまいりまして、認知症の方のための芸術プログラムというのはどういうものがあるのかなということに関心を持ちました。

私の古巣でもありますニューヨーク近代美術館が、認知症当事者の方とご家族を対象にした対話型プログラムをやっているというのを知りまして、その認知症当事者と言われる方々がもうあまりにも感情を込めてご自分の思ったことを生き生きとお話しされて、笑顔にあふれる会だったので、日本全国でこのプログラムが実施されることが望ましいと、壮大な夢を抱きましましてまいっております。

いまやっている活動は実はコロナになる前は、国立西洋美術館で毎月認知症当事者の方とご家族を対象にしたプログラムを定期開催いたしまして、なかなかその高齢者の方が美術館にいらっしゃることがとても大変だということがわかりましたので、私どもが高齢者施設に伺って、このプログラムを実施するということを始めました。アトリップというプログラムは別にアートが好きな方だけのプログラムじゃないのですね。大抵の場合は、高齢者の方ってそんなにアートになじみがない方が多いです。実際にプログラムに参加されてくると本当に楽しいというふうに言ってくださいます。自然とそれが 2 年も 3 年もリピーターになっているという感じですね。

○参加者 1

いろんな方がそれぞれの意見を言うじゃないですか。そうすると、視点がそれぞれ違うから「あ、そうなんだ」みたいな感じで楽しいですね。普段、一つの絵をあんなふうにじっくりは美術館に行っていないから楽しかったです。

○参加者 2

一枚の絵についてこうやって語り合えるというのはすごく素晴らしいなど。他の方の感想を聞くといいのいいのですね。そして自分の思ったことも言えると。それで雰囲気的にもその自分の思ったことを素直に言っている場所であるという、そういうのもすごく嬉しいし非常に楽しかったです。

○一般社団法人 ArtsAlive 林氏

初対面の方が皆さん初めてそこで会うわけですが、毎月毎月顔を合わせていく中で「このプログラムに来て本当に一番嬉しいことは新しい友達ができたこと」だとおっしゃったんですね。そういうことが自然に起こっていましたので、それを目的にはしていなかったのですが、これはきっと孤独・孤立対策というものにも役立つのではないかなと思って、やはり一度きりのイベントで孤独・孤立が解消するということはないのですよね。ですので、私が強調したいのは、こういうプログラムは継続してこそ意味があるということ。以前も認知症の方とやっていたときに、認知症の方は忘れてしまうのですよね。ですから、お嬢さんが迎えに行っても、今日美術館に行く日だということを忘れていてパジャマのままでいるということがずっとだった。だけれども、半年か8ヶ月ぐらい経ったときに、認知症のお父様からお嬢様のところに電話がかかってくるようになったんですね。「明後日は美術館に行く日だね」としっかり準備をして待っていてくださる。すなわち、その方にとってはそういう繰り返し毎月美術館に行き、同じ仲間と絵を楽しむということが本当に一つの生活のリズムになり、生きがいになっていったと思うのです。

ですから、本当にこのプログラムをまた継続できるように私達も努力をしたいなと思いますし、私達の活動は本当にインクルーシブですから、認知症の方だけではなくて認知症の方とご家族とか、認知症の方と介護士さんとか、全ての方が介護士であるとか介護されるとかという肩書きを捨てて、企業でも部長とか平とかという肩書きを捨てて、みんなが対等にアートを楽しむということをしています。

実際には今回、アート茶話会ですとか、Artrip+α（アートリップ・アルファ）、Artrip+αというのは実は働いている人を対象にしたいなと思いました。その方たちも実はいろんなことを抱えているということがわかりました。ですから、これからは誰かを排除ということなく、このアートにアクセスすることができない人たち、アートの面白さにまだ気がついていない方たちにそういったものをアートリップを通して届けていけたらなと思っております。

（動画終了「一般社団法人 ArtsAlive」）

○一般社団法人 ArtsAlive 林氏

動画をご覧いただきましてありがとうございます。では引き続きまして、補足説明的ですが私私のプレゼンをさせていただきます。

アートリップという、これがいま皆様に見ていただいたプログラムなのですが、これはアートの勉強会ではなくて、本当にアートの中をみんなで旅しようというコンセプトでアートのトリップということでやっております。

アートの見方というのは本当に多様で皆さん人生経験も年齢も様々で、人間というのは100人いれば100通りの感性を持っています。ですので、そのアートを見て感じたことというのは皆さん違っていますので、それを表現するためにこのアートリップのロゴはいろんな色で表現しております。旅ということで帽子もかぶっていたり、また真ん中は実はこれルビンの壺というものですけれども、青いところを見ればコップのようなものが見えますが、白いところを見れば顔が見えるという、これは大体半数ぐらいの人々がそれぞれを見るという感じになっています。

私どもは 2009 年に創業しまして、本当に人生の最後の瞬間まで障害の有無に関わらず尊厳を持ってその人らしく生きる、そういう社会を芸術の創造性と非日常性を通して実現できるのではないかと、実現したいと思って創立いたしました。

いまご紹介した活動以外に、児童館や高齢者施設でアート創作ワークショップをやりましたり、美術館等でこのアトリップをやったり、また調査研究事業もやっております。というのは、認知症の方にやるということでやはり医療従事者の方の関心も高いので、やはりそういう認知症予防とか、そういった観点からもこのプログラムを実施しております。このプログラムを日本全国に広めるということを 2012 年からやっております、人材育成もやっております。

このプログラムの特徴としまして、まずそのときを楽しむということですね。これは認知症の方のために特別に作ったプログラムですけれども、認知症の方が無理なく楽しめるプログラムというのは実はビジネスパーソンからこどもまで誰にでも優しい、楽しめるプログラムであるということになります。最初からこの社会との交流ということを目的に活動しております。

効果検証を 3 回やっております、最初は経産省の補助事業を受けましたときに、国立長寿医療研究センターと組みまして、認知症 MCI の方の鬱の改善と認知力の改善兆候という効果があるということが認められました。

そして国際的にもアートとか、音楽とか、そういったことが人間の健康に非常に影響があるということがわかってきておまして、3000 ぐらいの論文ももう既に出ております。国際的にはこういう研究がたくさん為されていまして、私どもも国際治験、A-Health というものに関わって 2019 年に実施いたしました。非常に QOL の向上ですとか、フレイルの改善兆候も見られました。

そして最後に認知症になられてしまった方の BPSD、周辺症状が人間関係ですとか、その方の感情がプラスになっていくということで良くなっていく。

さらに私どもの活動は美術館で実施しておりますということと、高齢者施設に訪問して実施しております、病院でもやっております。

それから企業でもですね、実は最初はストレスチェックの高いところ、鬱の改善効果があるということでストレスチェックの高いところでやっていたのですけれども、いまは全従業員を対象にしたプログラムをやりましたり、肩書きを捨てたプログラム、それから、新入社員研修なんかもやらせていただいたり、ダイバーシティ研修にも Google Japan 等に採用していただいております。

あと学校にも呼ばれて、実は学校のこどもたちも学校の中で自分のありのままの姿ということはいまあまり言えない、好きなことが言えないと思っている生徒さんが非常に多いということで、答えのないことについて生徒に考えさせてそれぞれが好きなことを感じて、それを共有していくというプログラムをここ数年やらせていただいております。

このような人材育成が非常に重要で、やはり全ての人が安心してありのままを出せる、心の内を出せるというのはそんなに簡単にできるのではなくて、そのような気持ちになっていただくための様々なやり方を教えております。

これからこういったプログラムを継続するということが本当に重要なのです。これは認知症の方だけではなくて、全ての方、企業の方もやはり 1 年ぐらい継続されますとその方に大きな変化が起きてきて本当にクリエイティブになっていらっしゃるし、実は OB の方、会社を辞められてからも、このプログラムに希望されて参加しているということもございます。

こういうプログラムをまずその孤独・孤立ということからしますと、孤独・孤立されそうな方というのがどこにいらっしゃるのかということ是非常にわかりにくい。今回、北区社会福祉協議会と連携させていただきましたけれども、まだまだ私どもがリーチできていない方がいらっしゃるのではないかということで、情報をどうやって得るのかということ、それからどうアプローチするのか、こういうプログラムを実施する場所ということも非常に必要になります。そしてプログラムを実施するアートコンダクター。それからやはり費用もかかってまいりますので、この開催費用をどのように賄っ

ていくかと、これはやはり官・民・学・個人の緊密なネットワークをそれぞれができることをしあって、他のNPOや企業等とも連携していくということが非常に重要なのではないかなと思っております。

私のこの活動は2020年に「アトリップ入門」という本にまとまっておりますので、もし興味を持っていただけたら、後日ご覧いただければと思います。また、実際に場所に来るということは大変ですが、コロナのときに始めたのですが、オンラインの活動というのは三つやっております。認知症の方とご家族向けというものもありますが、一般の方が参加できるオンラインプログラムも月に3回やっております。

対話ということですので、リアルに会えれば一番いいのですが、やはりオンラインでも定期的に繋がる会というのがアートを通して実現できております。コンダクター養成講座は6月22日、23日を予定しております。

大変早口で失礼いたしました。ご清聴ありがとうございました。

○大西政策参与

ありがとうございました。皆さん、拍手をお願いします。ArtsAliveさんに本当にいろんなご発表をしていただきましたけれども、アートを通じて人と繋がるというところで、なかなか1人で行ってこの絵を見て何か感想言いたい等う感じたか言いたいなといってもなかなか言えないとか、逆に僕なんかあまり教養がないので絵を見ても馬鹿にされるのではないかと、変なことになってしまうのではないかと、そういうのもたぶん皆さんがコーディネーターをやりながら、皆さんのお声とか感想を上手に引き出されて、先ほど映像でもありましたけれど、認知症の方なのかかわからないですけど、話ができるという、ここで絵についてこんなに話せたというのがすごく印象的な笑顔だったかなと思います。また後ほど、ディスカッションパートでよろしく願いいたします。

○一般社団法人 ArtsAlive 林氏

どうもありがとうございます。

○大西政策参与

100万人のクラシックライブさんもArtsAliveさんも映像があつてすごくイメージがしやすくてありがとうございました。この後少し私からまたご紹介があつてスライドを投影していただいてよろしいですか。

実はいま100万人のクラシックライブの蓑田さん、それからArtsAliveの林さんを含めてご紹介ありましたが、「孤独・孤立対策に資する官民連携の取組推進」ということで、いま政府としても様々な取組をご紹介するということを準備しております。

令和5年度事業計画の官民連携プラットフォームの新規取組として、この「孤独・孤立対策に資する官民連携による特色ある取組みの推進」について決定をして、募集依頼をさせていただいてたくさん応募いただきました。

そのうち7つの事例について担当幹事の湯浅さん、奥山さん、室長と私の4人で取材をさせていただきながら、記事化をして紹介を行うということも行っております。

次にご登壇いただく団体はまさにここで取材をさせていただいた団体でございます。この記事では地域密着型サードプレイスによる「相談・参加・地域づくり」の一体的支援事業ということで応募いただきました、NPO法人クラブしっきーずのクラブマネージャー増田さんに次のご発表いただければと思います。増田さんは会場に来ていただいております。よろしく願いいたします。

○NPO法人クラブしっきーず 増田氏

それでは改めまして皆さんこんにちは。

NPO 法人クラブしっきーず クラブマネージャーの増田康太と申します。孤独・孤立対策としてのつながり作り、いまご紹介ありました官民・民民連携の取組としてしっきーずの取組を写真と一緒にご紹介できたらと思います。よろしくお願いします。

クラブしっきーずは、文部科学省が策定したスポーツ基本計画に掲げられた「総合型地域スポーツクラブ」として 2000 年にスタートしました。スポーツやレクリエーション、文化活動等を通じ「スポーツと福祉を融合したまちづくり」をテーマに、市内外いろいろなところで活動してまいりました。

みんなの「あったらいいな」をプログラム化し、気がつけば 25 を超える多チャンネル型となり、いつもどこかで黄色いのぼりを目印に活動しています。

地域住民のご理解や応援をいただき、2008 年から空き店舗（お花屋さんや薬局）を活用した「しっきーずステーション」を開設。コミュニティカフェの運営をスタートしました。

2012 年には、埼玉県や地元の企業（不動産さんや内装屋さん等）から応援をいただき、柏町 4 丁目にしっきーずステーションを移転。世代や障がいの有無を問わず、だれもが気軽に立ち寄れるコミュニティカフェを日常的に開き続けました。

2012 年からの 9 年間、しっきーずステーションを 1,509 日オープンし、19,524 人の参加がありました。コミュニティカフェの運営やお泊まり会等、「場の持つ力」を十二分に発揮していたときのコロナ禍でした。早期の収束は無理と判断し、小規模分散・屋外での「巡回常設型地域サロン」に移行。しっきーずステーションもコーポの一室に移転し、継続のカタチを貫きました。

形を変えながらも「まちに暮らす人とともにある」ことを追い求め、いつも「いまできること」を考えアクションを起こす。それは、暮らしの現場で日々繰り広げられる日常に寄り添うことでした。

コロナ禍における自粛生活によるフレイルの進行、社会から孤独・孤立に悩む人の増加、人間関係の希薄化等、見えてきた課題に 1 つずつ丁寧に対応してきた取組が、2021 年から現在まで続く『サードプレイス事業』です。

具体的には、①小中学校の体育館や駐車場を会場とした多世代参加型（7 歳～90 歳代）の体力づくり事業、②屋外開放空間（お寺・神社・河川敷・公園）や町内会館を会場とした地域サロン事業や放課後の居場所づくり事業です。これはどなたでも参加できて、予約なしで参加できるプログラムです。2021 年度には 394 回実施し 4851 人の参加、2022 年度には 412 回実施し 5071 人の参加がありました。地域住民が来るのを待つだけではなく、行政・社会福祉協議会・地域団体が主催している行事等、地域で行われている様々な活動の場やしっきーずが行くことも大切にしています。

「最近足腰が弱って会場まで行けないんだよな」という声があれば小中学生が手紙を書いて高齢者さんに会いに行って、「病を得てからもう何十年海を見ていないな」という希望があれば、若い世代が運営を担い、バスを仕立てて海へ行く。ないものねだりではなく、世代の多様な市民が協力してあるもの探しをすれば、地域の課題を解決できる。そう信じて活動をしています。

また 2021 年 4 月、しっきーずの元気印とよく呼ばれているのですが、法人の理事長、みんなから「ますださん」と言われていますが、急遽脳梗塞を発症しました。その後半年間の入院リハビリ生活を経て退院しました。片麻痺が残りましたが、現在は訪問リハビリを併用しながら現場にも復帰しています。入院中にたくさんのメッセージをいただき、「しっきーずに復帰したい」と励みになった。「待ってくれている仲間がいる。」「自分の居場所が地域にある」ことが明日を生きる活力になっているとますださんは言います。

このように小・中学校や町内会館、屋外開放空間や地域のイベント等、しっきーずはいつもどこかで黄色いのぼりを目印に活動をしています。いつも地域の現場にいて、いま何が求められているのか等、いろいろな気付きがあります。この地域のニーズに合わせて、こどもから高齢者さん、しっきーずのメンバーみんなでアイデアを出し合い、あったらいいなを形にしてきました。それがこの

図の地域密着型サードプレイス事業です。小学生から元気をもらいながら運動して、心も体も健康になりたいというシニアさんは月曜日に小学校の体育館に運動をしに行く。運動はちょっと得意ではないけれど仲のいい友達が言っているし、いろいろな遊びが楽しそうだからという子は水曜日の放課後に異年齢広場に参加する、たくさんの人がいるところはちょっと苦手なのだけでも、高齢者さんと一緒にご飯を作ってお喋りするのが好きという子は金曜日のどなたでも食堂に参加する等、多種多様なプログラムがあることで一人ひとりに合ったプログラムが見つかります。

こどももシニアさんもしっkeeずのプログラムに参加する中で、お互いにいろいろなことを教え合ったり、褒め合ったりします。その中で少しずつ自己肯定感・有用感が高まり、自信がついていく。自分の役割が見つかることで、また行こうという気持ちになり心が上向いていく。きっかけは困りごとや悩みの相談であっても、しっkeeずに参加する中で地域作りを担っていく、これがしっkeeずの大きな特徴です。地域や場所もあるし、人もいます。それぞれの良さをどう引き出しどう活かすのか、つまりどうファシリテートしどうコーディネートしていくのか、いつも地域の現場にいて、地域全体を把握しているコーディネーターの存在が、価値観が多様化した現在には特に求められているのではないかと思います。

一人ひとりの悩みをコーディネーターひとりで解決するのではなく、コーディネーターが中心となって悩みをみんなで考え、それぞれの思いを共有していくことで、福祉マインドを持った次の世代が育ち、担い手も若返る。だから活動が続いていくのではないかと思います。

最後になりますが、いまから 13 年前になりますが、僕は六つ上の兄の長男を自死自殺で亡くしました。ちなみに兄がミュージシャンだったということもあり、生前の様子を映画監督が映画化し、「わたしたちに許された特別な時間の終わり」というドキュメンタリー映画になったりもしました。

幼い頃から仲の良い兄弟で、大人になっても一緒にお酒を飲んだり夢を語ったりしていたのですが、兄は躁うつ病に少し悩みながらも働いて生活している姿に、いつまでも兄は当たり前のようにいる存在だと思っていたその矢先にぱっとこの世を去ってしまったのですね。

それからやっぱり大きな喪失感やどうしようもない後悔もありましたし、いまから 10 年以上も前です。自死自殺に対する社会の理解であったりとか、社会整備もなかなか進んでいない厳しい現実がありまして、僕自身孤独・孤立に悩んでいました。

そのどうしようもない現実に押しつぶされそうな自分がいまして、死んだ方が楽だなと思ったりしたこともちろんたくさんありますし、でも両親や三つ上の兄の事を考えると僕まで死んでは駄目だなという、この死にたいというマイナスの状態ととりあえず生きなくてはいけないというその 0 の状態を行ったり来たりする日々でありました。

専門機関での相談支援であったり、服薬の大切さは僕も重々承知しているのですが、その両方を頼っていた兄が死んでいったというその現実には毎日向き合い続けてきたというのがあります。とりあえず生きるという気持ちが大きく、その先に暮らしの現場である地域というフィールドでゼロからプラスへと回復していくような支援というのはどうしたらできるのだろうということにずっと向き合い続けてたどり着いたのが、このスライドの図だと思っていただけたら幸いですし、兄の死を忘れるのではなくて、真正面から向き合い続けて、地域の皆さんに僕も支える側であるし、僕も実は支えられているというところでやってきたからこそ、僕はいま元気で健康になっていられるのではないかなと思います。そこに地域密着型サードプレイスの一つの可能性はあるのではないかなと思いますし、今日はその辺にちょっと触れられたらと思いますので、今日はどうぞよろしくお願いします。

○大西政策参与

増田さん、ありがとうございます。今日実は、お母さまも会場にいらしているということでして、まさに支える・支えられるということではなくて、お互いが支え合うというところがまさにすごく大事なポイントなのかなというところと、埼玉県志木市でも本当に毎日あらゆる活動、スポーツから

レクリエーションから食堂からお勉強もやったり、本当にあらゆる活動をされているということで、たぶん当事者のニーズにというよりは一緒に作り上げていくみたいなのが特徴なのかなというふうにも思いました。しっきーずの増田さん、発表ありがとうございました。改めて拍手をお願いいたします。

4 団体目の活動のご報告に向かいたいと思いますが、ここまでの 3 団体はどちらかというと民間団体、NPO の組織や一般財団法人、一般社団法人、そういった取組だったかなと思いますが、4 団体目は企業の取組に少しフォーカスしてご発表いただければと思っております。イオンリテール株式会社 経営企画本部 MySCUE 事業部長の駒井さんです。よろしくお願いします。

○イオンリテール株式会社 駒井氏

本日はこのような機会をいただきましてありがとうございます。大変光栄に思っております。本日は、イオンリテールが始めた新規事業について簡単にご紹介させていただければと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

皆様、イオンリテールというと、おそらく物販やスーパーといったイメージがあると思うのですが、我々もこれまでにいろいろな新規事業に対応してまいりました。例えば、左ですとコロナや、冷凍食品のニーズが高まったときに冷凍食品専門店ということで「@FROZEN」というお店を出しました。こちらは 2000 品目ほどの冷凍食品に特化したお店を展開しております。

右はシェアリングエコノミーが拡大する中、物を持たない若者、若い世代に対応して新たな価値観に対応したレンタルドレスの「LULUTI（ルルティ）」という事業も展開しております。当社の新規事業の取組というのは、社会課題の解決や対応というのが我々の使命と考えており、いま新たに事業を立ち上げましたので、それについてご紹介させていただきたいと思っております。

我々がこの事業を立ち上げる背景をまずご説明したいと思っております。ご承知の通り、高齢者人口は今後ますます増加します。2025 年にはシニアの市場は 100 兆円まで成長すると言われていますが、一方で高齢者を支える生産人口というのはどんどん減っていったって、2050 年には高齢者 1 人に対して 1.2 人で支える時代が予測されているということでございます。

そしてこれらを支える方々は時間の制約であったり、経済的・身体的・精神的に非常に負担を強いられることとなります。インタビュー等を通してわかりましたが、支援の制度やサービスを知らないことでより負担を大きくしてしまっている方、人に相談できずに 1 人で悩んでいる方等、多くの方々が悩んでいらっしゃいます。我々のリテールとしてこれは大きな課題だと考えております。

ここで私どもはケアされる側、高齢者の方々、直接ではなくケアをしている方に焦点を当て、この方々をサポートする事業を昨年 9 月に始めさせていただきました。我々がいままで何もしてこなかったかということではなく、例えばシニアケアの領域ですと、商品ですと例えば健康食品であったり、それこそ車椅子やお洋服であったり、またサービスでいうとイオンスマイルというものがあり、こちらはデイサービスの事業であったり、高齢者向けに即日便や移動販売等というのも取り組んでまいりました。設備環境についてもバリアフリーやサポートレジ、認知症サポーターも養成させていただいております。

今回、新たに 3 つのタッチポイント、左から情報サイト、真ん中が店舗で右がマーケットプレイス、EC を考えております。こちらの 3 つのタッチポイントを通じて、お客様をサポートしていこうと、ケアラーの方々をサポートしていこうというかたちで事業を始めさせていただきました。

MySCUE という名前の由来なのですが、簡単に申し上げますと MySCUE の「SCUE」の部分は英語の「レスキュー」や「救う」といったことで、我々はケアラーの方々を救うといったメッセージをこちらに込めさせていただいております。

MySCUE とは「シニアケアをもっとスマートに」と考えております。こちらは我々のミッションと考えております。これは決して我々が介護やシニアケアを簡単なものだと考えているのではなく、今

後ケアラーや介護というのは特別なことではなく、誰にでも訪れることである。また、DX や技術がどんどん発達していますのでこれを実現できるのではないかとということで、我々の願いを込めて「シニアケアをもっとスマートに」とさせていただいております。

こちらは先ほど申し上げたケアラーですが、真ん中の一番濃い黄色は日常的に介護に携わっている方々。その外は部分的な日常生活のサポート、例えばお買い物であったり、病院に連れて行ったり、そういったサポートしている方々。また一番外側ですが、まだ全然関わっていない、いずれ関わるであろうという方々を対象として、サービスを提供してまいりたいと考えております。

こちらがプラットフォームの全体像でございます。真ん中が我々MySCUE、先ほど申し上げた三つのタッチポイント、情報サイトとマーケットプレイスと店舗がございまして、左手にケアラー（お客様）、右手にパートナー様で、我々はこのお二方をつなぎ合わせて、より良いシニアケアの環境も作っていききたいと考えております。

こちらの三つの①②③のタッチポイントのうち、昨年9月に「①情報サイト」がオープンいたしましたので簡単にご紹介させていただきたいと思っております。

こちらの情報サイトを開発するときに我々は徹底的にケアラーの声を聞きました。我々はいままでファミリーの方々を中心にやってまいりましたので、徹底的にお客様の声を聞いて、インタビューやアンケート等をして、お客様の声を生かしたサイトにしております。右手にございます「12の課題」というのがありますが、こちらはその結果、我々が独自に考えた12の課題（ケアラー様は4つの課題、ケアされる側は8つの課題）について、サポートしていく事業を目指しております。今後我々がお店であったり、商品であったりにつきましてもこの12の課題を解決することを基本としてサービスを提供していききたいと考えております。

いまは5つありますが、簡単に孤独に関することをご紹介いたしますと、例えば相談・質問というのも介護しているとか、ケアをしているとか、なかなか身近な人に言えないということもございまして、匿名で介護したことある人や専門家に相談できるといったコーナーも設けております。また一番下のコミュニティ、こちらにも例えば「介護が今日も大変だった」みたいな、コミュニティを立ち上げて、同じ立場の方と共有していただくような場も作っております。

今後のスケジュールですが、昨年9月に情報サイトがスタートしまして、24年度以降に店舗とマーケットプレイスを順次開発していききたいと考えております。

情報サイト以外にもいくつかイベントをして、こちらのスライドの様子は昨年、幕張イオンで事業をスタートしたときに六つのブーステーマ、ケアラーさんが抱える課題別にブースを設置して、お取引先様の協力を得ながらお客様にお越しいただきました。

これまで半年間活動をしてきたのですが、おかげさまで4.5万人の方に会員になっていただきまして、我々の事業に共感・共創いただいたパートナー様は100社、行政様・自治体様が8ヶ所、イベントにご参加いただいた方はおよそ1万人ということで現在活動を進めております。

最後に我々が目指すところについて、シニアケアに関する日常を変えることを目指しております。お客様の声を聞いて、パートナー様とともにケアラーに寄り添ったプラットフォームを作り上げていきたいと考えております。

以上でイオンリテール MySCUE 事業部の発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

○大西政策参与

ありがとうございます。これまでの3団体は民間のNPOの活動だったかと思いますが、イオンリテールさんは必ずしも社会貢献としてということではなく事業としてやられているということで、民間企業の方が社会貢献的に、例えば寄付や何か物資を提供するみたいな取組も少しずつ進んでいます。いわゆる事業活動の中で社会課題にビジネスの手法をしながら積極的に取り組んでいく活動になっているのかなということを思いました。少し見ただけで本当にたくさんの記事があって一つの大き

なコミュニティができているのかなというところも含めて、後の取組も含めて非常に面白いなと思いました。

パネリストのお2人にここまでの発表を聞いた感想をいただけたらなと思っているのですが、湯浅さん、ここまで本当にバラエティーに富んだいろんな取組でしたが率直に感想はいかがでしょう。

○湯浅氏

皆さん、ありがとうございました。とても興味深い取組で私も勉強になりました。

孤独・孤立対策ですけど、ちょうど丸三年経ったところだと思います。2021年2月にキックオフ集会がありましたね。そのときからずっとついて回っているだろうなと思っているのは、いままでやられてきた各種対策と何が違うのだということかなと思っています。主に厚生労働省が多いですけど、高齢者対策・介護・障害・自殺対策等、それぞれのテーマではそれぞれの蓄積があって担当所管があって、わざわざ孤独・孤立対策をその中で改めて立てるとしたら、それは何がその外に付け加わるのだという話になりますよね。

その中で私自身は何か掛け算というか、いわゆる福祉分野と福祉以外の分野が掛け合わされて相乗効果を出すというか、意外なアプローチをするというか、何かそういうところにこの内閣官房に孤独・孤立対策が置かれた意味もあると考えてきました。

その中でやはり大きいのは、今日もお話しにあったように音楽やアート等、増田さんのところは教育やスポーツと言っていますかね。いわゆる福祉や厚生労働省等、それまで脈々と流れてきた取組と別の取組がここでかけ合わさっていくみたいなのが見えてくると、省庁横断的に孤独・孤立対策をやったということの意味が見えるし伝わって思ってきました。

そういう中で、もちろん少し重なる形でですけども、今日はまさにいわゆる福祉分野ではない分野の皆さんから孤独・独立へのアプローチに取り組まれていることがわかって、こういったところが中央省庁レベルはもちろんですけど、各地でできている孤独・孤立の地域のプラットフォームの中でのいろんな掛け合わせが広がっていくといいなということを改めて思いました。

○大西政策参与

ありがとうございます。山本室長は改めていまのお話しを受けてでもいいですし、4団体のご発表をお聞きになって、率直な感想をいただければと思います。

○山本室長

4団体の皆様、本当に参考になる事例紹介をしていただきましてありがとうございました。最初に100万人のクラシックの蓑田さんがおっしゃったように、いま日本の社会はもともと非常に強い人のつながりがあった社会やコミュニティが崩れてきている。その中で人のつながりをどう作っていくかという新しい形はまだしっかりとできていない。従って、孤独・孤立の問題が出てきますし、よく皆様がお聞きになっていると思いますけれど、社会関係資本と言われているような人と人とのつながりというのは世界的に見ても非常に弱いと言われています。その中で昔のような形を再現するというのではなくて、いまのこの時代に合った人と人とのつながりを緩やかに作っていくにはどうしたらよいかというところにいま来ていると思います。

100万人のクラシックライブさんでキーワードとなるのはやはり感動を共有するということであり、そして場を作るというところ。場を作るときにソフトは100万人のクラシックライブさんが提供できますが、場というのは様々な方々のご協力が要ると思うのですよね。それでそういう実践をされていると思います。

そして次のArtsAliveさんのいいところは、アートの見方は極めて多様であるということですね。多様性が許される。またそれをもとに、自分がありのままでいながら人との会話の接点もできていく

ということだと思うのです。もともと美術館等を拠点にされていましたが、出前もされているということで、様々な場を開拓していかれているという取組なのだろうと思っております。

それからクラブしっきーずさんは、私が直接取材させていただきました。その節は本当にありがとうございました。その取材を見ている中で、本当に参加者がこの様に変わっていくのだなと感じました。この活動の中で現場を見させていただいたことが非常に印象的でした。サードプレイスっていうところがキーワードだろうと思っているのですよね。

よく家庭や職場、学校が第1の居場所、第2の居場所というのがあるのですが、その中でその人の評価が限定的になっていくことが多いのですが、サードプレイスというまた別の居場所があることによって、人と人とのつながりが広がり、別の角度から自分を見てもらえるようになる。その中でやはり参加されている方が自信をつけていたり、自己肯定感を高めていくという、そのようなすごくいい機会だったと思うんですよね。見させていただいて、お子さんがシニア世代の方に寄り添って、教えていくというのを現場で見させていただいて、まさにそこで自分の役割を発見しているんだなと感じました。

ですから人のつながりを作るときに、いろんな角度から居場所というものが開拓されていくというふうに思いました。そして様々な拠点をいろんなところに作っていくということですね。1ヶ所ではなくて、地域の人たちにそういう活動の場を開拓していき、様々なところに設定し、しかもいろんなメニューがある。いろんなメニューがあるということが大事で、ある人はあの子のこの活動は全然気付けなくても、この活動だったら入っていけるというのがあると思うんです。

そういう多様性がすごく大事であると思います。以上のような民間の非営利の団体の取組は、よく福祉的な活動されている方は福祉の支援から入っていくので、そこからこの人たちも努力してどんどん開拓して広げていっていますけれども、日常生活の場でまさに私達が普通に活動している場でつながりを緩やかに作っていくというのは福祉を超えたものだとはっきり言っています。そこで内閣官房等、政府全体で調整しながら、広くあまねく様々な分野に足を入れて取り組んでいただくというふうになっているものです。

最後に MySCUE の取組をご紹介します。民間団体が情報のハブとなるような仕組みを作っていただくというのはすごく大事なことだなと思いました。実は行政施策が様々な支援策を設けたり、相談窓口を設けているのですけれども、必ずしもそれが狙いとした人に届いていないという問題があるのです。

これは物理的なハードルの問題と心理的なハードルの問題の両方あるわけですね。それをできるだけハードルを低くしていくためには大体想定されるような困り事をいろいろアクセス可能な方法で提供していく。

そしてこれは自分だけの問題ではないよということですよ。ここでもブログでいろいろ体験談みたいなのを共有されていると思うのですけれども、それもすごく重要でそういった視点を全ての省庁の施策に取り入れてください。これが横串を刺す孤独・孤立対策ですね。それは民間企業でもビジネスとしてやっけていただいている。これは非常に大きなことだと感じました。

○大西政策参与

ありがとうございます。湯浅さんからは掛け算という非常に重要なキーワードについて、室長からはメニューの多様性について言及していただき、今日の本質的な議論につながるキーワードがいくつか出てきたかなと思います。あと 40 分程ディスカッションできればと思っております。事例紹介いただいた4団体、パネリストの2名、私の7名でお届けしたいと思います。

一つ目のディスカッションテーマは、「皆さんのそれぞれのつながり作りの取組がどんなことを大切にして取り組んでこられたのか」についてです。蓑田さんよろしいでしょうか。

○一般財団法人 100 万人のクラシックライブ 養田氏

何を大切にしたかということについて、やはり人間の中には「私は孤立です」や「孤立しています」という人はいないですよ。 「寂しいです」という人もあからさまにはいないのだと思います。従って、何か彼らが心を動かすものを持ってこなくてははいけない。我々は別に孤独・孤立対策のためにこの活動を始めたわけではなく、様々な人が世の中にいて様々な重荷を背負って生きている。大変な中でやはり心が動かないとたぶん生きているということに対する生きる力は出てこないだろうと思っています。我々のところは、クラシックの生の演奏を身近で届けるということで心を動かしてもらうということですね。

それは本当に体で感じてもらうといいですか、お年寄りであれ、赤ちゃんであれ、誰であれそれを感じてもらうということが、たぶんその心を動かすことにつながる。心が動くとき当然ですけど周りに対する配慮とか、あるいは周りの人を意識するということが起こってきます。

なので、自分のことだけ・目先のことを考えているのではなく、心を動かすことによって自分はいろんな人に囲まれて生きているのだなと思ってもらえれば、そこからおそらくいろいろな彼らの人生の新たな動きが出てくるだろうと思って活動しています。特に駅等でコンサートを行うと、様々な思いを持ってサラリーマンの方が見に来られて、涙を流して音楽を聞いておられたりするのですね。

涙を流している理由を聞くと心が動いたということで、行き詰まったときに音楽を聞いてよかったとのことです。先ほど Arts Alive の方もおっしゃっていただきましたけれども、我々は出かけていって、誰が聞くかわからないけれどもそこで音楽を鳴らすという、一種の音楽の押し売りをして、そこで様々な人が様々な心模様の中で音楽を聞くことによって心を動かすということを目指して活動しているということだと思います。

○大西政策参与

ありがとうございます。音楽の押し売りって面白いですね。心を動かすものを持ってくるというのはすごく素敵な表現だなと思いました。福祉関係者や支援を協議している人に向けた支援方法についてのメッセージの一つなのかなと思います。林さんいかがですか。

○一般社団法人 ArtsAlive 林氏

アートというのは、特に日本においての美術館等は敷居が高いと言われていています。これは別に高齢者に限らず、子どもたちにも美術館という敷居が高いと思われてしまっていて、それは本当にアート界のこれまでの問題なのです。しかし、実はアートというのは本当に面白いものなのですね。私の活動というのは誰彼なく、アートの楽しさ・面白さに気づいてほしいという、言ってみればアートの押し売りかもしれません。アートの素晴らしいところは、どんな見方もできることなのですね。別にこうしなければいけないということはない。作家は例えば花を描くでもいろんなふうに花を書きますし、作家と同じように自由に物を見て自由に感じるということが実はアートを楽しむのに最も重要な要素です。認知症の方もアルツハイマーの方も情動といって感じる部分というのは最後まで残るので

ですね。

ですので、アートを見て感じる。そこで自分が感じたことを言語化することで初めて第三者にそれが伝わる。そうするとそれを共有することによっていままで知らなかった人に対してやはり親近感が呼び起こってくるのです。あの人は私と同じように感じている、あの人がこんなふうに感じるのだと。不思議なのは普段だったら意見が対立した場合、人は自分の意見を譲ることができないことも多いのですけれども、アートの場合はなぜか自分と違う見方をしている人の話を聞いてると不思議とそんなふうにも見えるなみたいに思ってきてしまって、プログラムを最終的に 1 時間程やるとみんな

が好き勝手なことを言ったにも関わらず、お互いに対するリスペクトやお互いが発見したことに対しての関心を呼び心が温くなる。

50 歳ぐらいの男性の方がおっしゃっていたのですが、冬の日にプログラムを開催した時はずっと温泉に入っていたみたいだとおっしゃったのですね。心も体もポカポカ暖かかったと。そういうふうな場を作りたいなと思ってやっているのですね。そうすると皆さん心地いいのでそれがやっぱり楽しいとか、そういうことが大事でまたやりたいと。

今も全国の美術館を回って高齢者認知症の方にやっているのですが、もうほとんど 100%の方がまた参加したいとおっしゃってくださいます。それはやっぱり楽しいということですよ。いま音楽も感動というのはありますけれども、感動に加えて楽しいという経験があるとまた次もやってみようかなと。その楽しい経験を共有した人たちと緩やかなつながりが当然そこに生まれてくる。

だから別に孤独・孤立対策を目的に活動してきているわけではないのですが、実はこれを通して離婚寸前の介護している方と介護されている方ご夫婦が非常にラブラブに戻ったり、親子関係も介護する人・介護される人という境がなくなる。身近な人間関係でもギスギスしていることが最近多いですけども、そういったものも良くなる。同じ家に暮らしていても実はあまりお話することがない。だけど、このプロジェクトに参加してからこの人こんなこと言っていたな、この人と少し話してみようかなみたいな気になるという感想もよく聞かれる。

そのため私が言いたいキーワードは、やはりそれぞれ楽しいことって違うと思うのでバラエティはとても大事だと思うのですが、アートというのを毛嫌いしないで何か楽しむということ。だから私はアートの会ではなくて、アートの旅と呼んでいるのですね。旅というのはみんなそれぞれがいろんなところに行っているいろんなことを自由に感じるものだと思うので、アートも旅をしていく。私達は安心安全に旅が楽しめるようにお供をするコンダクターというスタンスでやっている。全ての人のコメントを尊重していくと、それがとても居心地の良いふうになっていくのだろうなと思っております。

○大西政策参与

林さんありがとうございます。最近特に体験とか経験というのが支援や政策の文脈でも話されている部分がありますけれど、やはり言語化することが大事だなというのがおそらく、ArtsAlive さんの活動ですごくキーなのかなと思って聞いていました。言語化することでコミュニケーションが生まれて、つながりが生まれているというところは大事なキーワードなのかなというのを改めて思いましたし、楽しいって大事ですね。

なぜ敷居が高いのかというと楽しみ方がわからなかったりとか、話していいんだよというところが伝わることによって少し肩の荷が下りたり、鎧を外して話せるようになるみたいなのは、もしかしたらフラットに関わる一つの切り口なのかもしれないですね。

○一般社団法人 ArtsAlive 林氏

そうですね。だから、どんなコメントでも私達は絶対に受け止めるのですね。絶対に否定をしない。自分の思ったことがそのまま受け入れられるというのは実は日常生活ではあまりないのです。学生でも社会人でも、だからそういうことですごく心がリラックスして安心できる、そういう要素も必要かなと思います。

○大西政策参与

ありがとうございます。クラブしっきーずの増田さんはどんなことを大切にしたり重視したりして活動されていますか。

○NPO 法人クラブしっきーず

まず目的をぶらさないということはとても大事なのではないかと思います。孤独・孤立対策を掲げた時にいろんな大人が関わっているといつの間にかみんな自分のことしか言わないみたいなことは地域でもありがちになる。しかしそうではなくて、孤独・孤立に悩んでいる人がいたら、その人のために何ができるのだろうということをみんなでアイディアを出し合うことがぶらさずにやっていくことなのではないかと僕は思います。そこにみんな各々、いろんな意見が出たときにきちんと間に入って、この場合だったらAさんはこうだが、この場合はBさんのことを考えていくというふうにやはりコーディネートというのが一つキーワードになっていくのではないかなと思います。それを地域の現場でも大切にしていって、例えば1人の高齢者さんが孤独に悩んでいたとしたら、それを大人だけで介入や解決していくのではなくて、そこにいつもこどもも一緒にいることを大事にしている。例えば、地域で自転車に乗ったり歩いていて子どもに「(増田)康太、昨日どこ行ってたの」と聞かれれば、こどもにわかりやすいように噛み砕いて、「昨日、(増田)康太はこういうところでこういうことやってきたんだ」という話をする。例えば、一人暮らしの高齢者さんがいたら、「小学生は何ができるだろうね」という話をいつも地域ですしている。それを堅苦しく何か解決していきましょうではなくて、何ができるのだろうぐらいのところで話し合っていくことが大事。大人が介入してもなかなか解決しないものをこどものパワーはやはりすごいので、こどもがチャイムを押すだけでこの人こんな笑顔を見せるんだっていうことも実際起きたりして。だからさっきも話に出ていましたが、いろんな人やいろんなつながりがあるから掛け算になってくるのではないかなというのは一つ大事なところで、それが心を動かしているから解決できるのではないかなということですね。あとは先ほども出ていましたけれど、否定をしないというのもやはり大事でそこを役割としてコーディネーターが担っているのではないかなと思います。

○大西政策参与

ありがとうございます。ちなみに、まさに今クラブしっき一ずさんだったり、(増田)康太さんがやられているようなぶれないようにしようとか、そういうことを子どもの意見だとはねのけるのではなく、子どもたちの声もちゃんと聞いて一緒にやっといこうと始めたきっかけやそうしようと思った背景はどんなことですか。

○NPO 法人クラブしっき一ず 増田氏

団体として20年の歴史があると、スポーツやレクリエーションクラブでもあるので、面白おかしく解決していこうという空気感を作っており、こどもの頃からその空気感を感じて育ってきたというのがきっかけなのではないかなと思います。自分が実際大人になったらいまの時代に合わせてアップデートしていく。価値観が多様化していたらそこにもきちんとアップデートしていく。若い世代にも対応しながら、現場のプログラムに入れていくというのを大事にしています。

○大西政策参与

確かに、例えばスポーツをやるサッカー野球をやるとか、うまい下手とかはあるかもしれないですけどやらないとできないですよ。そういう中でちょっとずつ作られてきた文化みたいなものがあるということですか。

○NPO 法人クラブしっき一ず 増田氏

やはりクラブとしていつも掲げるのはクラブ文化をどう醸成していくかみたいなことは、いつも飲みながら話し合っているなと思います。僕はそこを見てきたからそうだなと普通に思って、それを見てたぶんこどもたちもそれが普通になっていくのだろうなと思います。

○大西政策参与

ありがとうございます。続いてイオンリテールの駒井さんに聞いてみたいと思いますけれど、今回 MySCUE のプログラム事業をやられるにあたって、どんなことを大切にしたり、重視をして事業を作られてきたのかというところをお伺いしてもよろしいでしょうか。

○イオンリテール株式会社 駒井氏

今回新しい事業ということ、またターゲット領域がいままで我々がチャレンジしたことのないケアラーということで、我々が今回大切にしたことは徹底的にケアラーの方々の声を聞くということです。

それは、一般のお客様であつたり、我々も 10 万人以上の従業員もいますので、従業員アンケート・インタビューという形で声を聞いてまいりました。そこで結構わかったことがありまして、ケアラーの方々はたくさん課題を抱えてらっしゃるというのですが、その中でもその原因を生み出す要因は二つありました。

一つ目はケアラーさんの心理的バリア、二つ目は介護に対して十分な知識を持っていないこと。この二つは関係しているのですが、どうしても自分の親だとか、自分の身内に介護が必要になるというのはなギリギリまで皆さん認めたくないというのがわかりまして、その結果知識を取りに行かない。例えば、出産ですと事前にこういう本を準備しようとか、いろいろ情報を取りに行くのですが、介護ケアに関しては皆さん積極的に情報を取りに行かないということがわかりました。その結果、気づいたら深刻な介護レベルに突入していて、人に相談することもできず、まさに孤立してしまうことがあることがわかりました。イオンリテールはもともとスーパーや GMS 事業をしていますので、常にお客様と接点があります。毎日数百万人のお客様がお買い物に来てくださいます。なので、私に限ってという方々に介護未満の段階から、何かあったら来てくださいねと門戸を開き、心理的ハードルを下げていくのが我々の役割かなといまは事業を進めております。

○大西政策参与

ありがとうございます。まさに介護は、誰もが人生の中で経験する可能性が高いものですが、どうしてもいざそうなるまで何をやっているかわからない。自分に関係ないと思いがちですが、普段の事業活動の中からもその方にそれを伝えていっているそのときに何かパニックにならないようにとか、そういうことも含めて相談しやすいような空気作りみたいなこともやられているのかなというお話を伺いました。

4 名の方それぞれお話がありましたけれども、パネリストのお 2 人に振っていきたいと思います。湯浅さん、ここまでのいかがでしたか。

○湯浅氏

皆さんのお話を伺っていて、駒井さんの話がもう身に詰まされすぎました。私の母はいま 82 歳で要介護 1 で、元気なようでもいるし悪くなっているようでもあるのだけれど、いまいちこちらとして向き合いたくないとか、そういう感じになってしまいますよね。情報をちゃんと集めているかという、仕事の活動はきちんとやれるんですけど、こういう話になるとへなちょこだなとちょっと身に詰まされておりました。

大事にしているところというと、「車とバイク」かなと思います。四輪車と二輪車というけれど、四輪車は予防に四つの概念があると言われてはいますが、公衆衛生の分野の話と同じです。1 次予防、2 次予防、3 次予防、最近では 0 次予防もかなり強調されるようになってきていると思います。

1 次予防は、地域みんなで減塩味噌汁飲みましょうみたいな感じですよ。2 次予防は高血圧になりかけている人に減塩味噌汁飲みなさいねと指導する。3 次予防は高血圧にすでになっている人にもうこ

れ以上進行しないようにリハビリやったり、それこそ減量指導したりするようなもの。0次予防は、自然に出歩きたくなるまちをつくる。なので、アートでいうと静岡市さんがいつもやっている街作りみたいな、何かいろんなイベントがあるとそこを見に行っているだけでついつい出歩いちゃうみたいな。別に孤独・孤立と謳っていないし、楽しもうと言っているだけなのだけれど、結果的にそういう街になる。あるいは公園が使いやすくなってみんながそこに行くようになると自然に歩くようになるみたいなのが0次予防。この0・1・2・3は、それぞれに独自の意味があると思っているので、それが車の4輪のようにそれぞれがきちんと回っていくことが大事ですし、1次予防的なことをやっている人、2次予防的なことをやっている人、3次予防的なことをやっている人たちが、何かお互いのやっていることのウエイトや役割を尊重し合うことが、大事なのではないかなと。

2輪車の方は、同質的なつながり、居場所の話で言うと同質的な居場所と異質な居場所、これら二つの価値を車の両輪として見るのかなと思ってまして。みんなしがらみは嫌ですから、でもSNSだけでは物足りない。このような緩やかなつながりを求めている人が多い。そういう中で地域の交流の場なんかまさにしっき一ずさんとかそういう話をされたのですが、異年齢で遊ぶとか、自分の学校とは違う学校の子と遊ぶとか、あるいは高齢者とこどもが触れ合うとか、そういう違う学校、違う年齢、違う家庭の大人、違うタイプの大人と出会うみたいな、違いというのをキーワードにする居場所があって、つながり方がありまして。こういうのを弱い紐帯と言ってそれを大事だと言ったグラノヴェッターという人が論文を書いてから去年で50年ですけど、こういうことが一方にある。もう一方は、とはいえ同じ境遇だからこそ安心できるという側面もある。同じヤングケアラーだから、1人親だから、不登校だから悩みを共有できる。そういう意味での安心感というのはやはり当然あって、やっぱり両方大事なんだと。そういう意味では、同質的なつながりと異質的なつながりの両方を尊重し合うということが大事。この4輪のそれぞれがきちんと回るということと2輪のそれぞれがきちんと回るということで車もバイクもまっすぐ進んでいく。そういう地域作りや社会作りをするということがイメージとして大事なのではないかなと思います。

○大西政策参与

ありがとうございます。室長はいかがですか。

○山本室長

湯浅さんが喋っていただいたことに私もかなり同意見ですけども、やっぱり居場所一つとっても先ほどの多様な居場所ということもありましたけれども、やっぱりどうしても特定の問題を抱えている方だけが集まる居場所、これがどうしても必要だと思います。

ですから、いろんな方が交流するような居場所もあれば、特定の方たちがお互い分かり合えるということで集まる場もあると。そういう多様性というものが特に必要でどちらもそれぞれの機能を果たしているんだということについてのリスペクトということは非常に重要だと思います。

先ほど0次予防・1次予防・2次予防・3次予防と言われましたけれども、それぞれ役割というのがあります。ただ、いままで0次情報のところは全く任されていたとか、放置されていたということがあるので、少し孤独・孤立対策というのはそういったところにもきちんと光を当てていこうということで着眼している。しかしながら全体としてそれぞれの役割をリスペクトしていかなければいけないというふうに思います。

○大西政策参与

ありがとうございます。お二人にかなりまとめていただいたのでコメントがないなと思いながら、モデレーターだからコメントしなくてもいいかもしれないですが、ただあえて少し追加的に言うとなると4団体の皆さんはすごくフラットな関わりをされているなというのはすごく思いました。

音楽もそうですし、アートもそうですし、運営している皆さん方もたぶん楽しみながら、何かそこはすごく面白いなというか、変に支援支援していないというか、何か一緒に考えたら面白いよねとか、こういうのを一緒にこういう体験したら楽しいのではないかとか、押し売りという言葉がすごく良いなと思いましたが、すごくシンプルに「こうしたら面白いんじゃない、こうしたら地域が楽しくなるんじゃない」ということをされていくことが、実はすごく大事なのかなというところで、まさにそれが四輪・二輪の話にもなり0時予防の話にもなりというところなのかなと思いました。

そうこうやっている間に、このテーマで1時間ぐらい喋ってしまいそうですけれど、そんなに時間がないのもう一つのテーマにも行きたいなと思っています。

今日ご参加いただいているプラットフォーム会員の皆さんは、NPOや社会福祉法人、そういった支援や市民活動・地域活動されている方はもちろんですけれど、企業や自治体の方だったりいろんな方がいらっしゃると伺っております。今日、リアルタイムではなくてもアーカイブでご覧になられている方もいらっしゃると思っていて、二つ目のテーマはざっくり言うと、「直接的な支援を目的としていない団体の協力とよい連携のあり方についてです。もう少し砕いていうと、要は自分たちと関係ない人たちとどう協力して、活動できるようになるのか。違うステークホルダーや自分たちとは遠いところの人にも協力してもらわないと皆さんの活動はできなかったりとか、「これ手伝って」というふうに上手に巻き込むことによって、活動が広がっているのではないかなと推察します。巻き込み方といますか、その工夫みたいなものがもしあればぜひ教えていただけると、ご覧になられている方であったり皆さんすごく参考になるのかなと思います。駒井さんから、さっきとは逆の順番でやりたいと思います。お願いします。

○イオンリテール株式会社 駒井氏

ありがとうございます。ご質問のご趣旨とずれてしまうかもしれませんが、昨年9月に事業をスタートしまして、200社ほどアプローチし100の企業様や団体様と一緒に行かせていただいたのですが、この中でそれこそ直接的に孤独・孤立支援に取り組んでいらっしゃる企業様や団体様というのはごく僅かだと認識しております。例えば、ケアラーの抱えている高齢者の方々が孤立していくのは、主に心や体の不調というので、外に出たくない・外出したくないと言って引きこもっていく。それで孤立されていくと思っているのですが、そういう意味でいきますと我々のパートナー企業様というのは栄養面であったり身体的サポートであったり、それこそ精神的なサービスというのも実施しておりますので、直接的ではないですけれど、孤独・孤立支援に貢献されているのではないかなと考えております。

簡単ではございますが、ありがとうございます。

○大西政策参与

ありがとうございます。どこかしらに接点があるということですね。直接ではなくても接点があるからつながるみたいな。はい、力強くうなずいていただきましてありがとうございます。では次、増田康太さんお願いします。

○NPO 法人クラブしっきーず 増田氏

関係ない人とどう一緒にやっていくかという話ですね。いつも地域のところにいろんな団体だや企業を回り、しっきーずニュースを毎月出していますけれど、毎月どんなことやっているよというのも、僕も会員さんもみんなで手分けをして、いろんな人がいろんな事業所や企業にニュースを持っていく。そこで井戸端会議というか、他愛のない話、そこに実はヒントがあったりするのではないかなと思います。

ニュースを届けて帰ってきたら「どうでした」みたいなところをいつも話しておく。「ここだったら何かこういう関わり方とか応援をしてもらえるかもな」というのをみんなでいつも出し合うようにしているし、ずっとそれをコツコツ積み上げていくと、だんだんと「うちもしっきーずに力になれることあったら言ってね」みたいな空気感が醸成されていく。ただそれは、ある程度目的や意図を持っていつも積み上げていかなければ、何となくでは積み重なっていかない。けれど、それを意図してやっているから、まずそこが積み重なって何かご一緒していくことができる。それをまた「あそこの会社さんはしっきーずにこういうふうに関わり方をしているんだな」というのをまた他が見て、「うちだったらこういうふうに見えるじゃん」と地域が回っていく。

ふわっとして「どうやったらできるだろうね」「そうだね」というのではなくて、具体的にいつも考えてみんなで共有することはやっていそうで、やっていないのではないかなとたまに思うことがあります。

○大西政策参与

いまの話は面白いですね。他愛もない会話や雑談の中から拾えることはたくさんありますけれど、しっかり戦略的にキーワードを拾おうと思わないと拾えないですね。そこを意識しながら拾ってからそれからってことですかね。

○NP0 法人クラブしっきーず 増田氏

そうですね。いまでいうと「タイムパフォーマンス悪くない？」みたいなことを言われてしまうかもしれないですけど、そうではない。その少しの時間をどうするか、こちらがやっていくところであり、それは僕1人で考えていても煮詰まるのであれば、Google 先生に聞いてみてどういう事例があるかや、他の専門の人に聞いてみると、「こうやったらいいじゃない」というふうにいるんな人が関わって、具体的に会話をしているから解決してくのではないかなと思う。

○大西政策参与

林さんはいかがですか。

○一般社団法人 ArtsAlive 林氏

本当にいろんな他業種の方とコラボさせていただいているのですが、まず例えば、高齢者施設に訪問するということはただ楽しいだけでは訪問できないということがわかりました。彼らの目的というのはやはり認知症を少しでも良くしていくとか、認知症の症状が進まないとかそういったことが目的であって、そういったことに少しでも役立つというデータを取ったときに介護施設に行ったり、病院でやるという門戸が開いたということがあります。ですので、それぞれの立場の方がそれぞれのミッションを持って仕事をされているので、彼らのミッションと私達の活動がどのようにつながることができるのか、私達のやっていることが彼らのやっていることにどう役立つのかと、そういう視点でアプローチしていくことがとても大事ではないかなと思います。

例えば、学校でも答えのないことについて子どもたちに考えさせたい、本物の体験をさせたいということだったら、私達の本物のアートと答えがないアートは多様なものだからっていうことで可能になると。

あともう一つは、やはり人と人とのつながりだと思うのですね。本当に個人レベルのことになるのですけれども、私も例えば全く知らない人といきなりどんなに素晴らしいプログラムでも、いきなりコラボはできないと思います。私の場合は20年ぐらいこの活動していますので、いろんな人に「いまこういうことをやってるのよ」と何かにつけて話しておきますとどこかでそれを思い出してくれる方がいます。「実は私の友人にこういうのをやっているのがいて」ということから私は昨年度から聖

路加国際大学病院でも教鞭をとることになりましたし、社会福祉協議会さんも実は友人が埼玉県でそういうボランティア活動をやっていて社協の方をご存知で繋いでくれたのですね。

ですので、いままでの人生でいろんな友人とか知人がいると思うのですが、そういった方々に連絡を密にして、いまこういうことを私やっているとこのことを言うておくと、彼らの方からいろいろと紹介してくれるということがあって、美術館も、美術館全部が私のプログラムを採用したいと思わなくても、1人の学芸員さんが本当に熱心に思ってくださいと、実は実現するのですね。1人でもいいからあなたの活動を心からいいと思って一緒にやりたいと思ってくれる仲間を作っていくということではないかなと思います。

○大西政策参与

ありがとうございます。仲間を作るというところと、前半のデータのところもすごく大事だなと思います。変な話、自分たちの活動をちゃんと可視化していないとデータというのはいけませんし、それがどう相手の役に立つか、メリットがあるか、双方の利益になるかという、かなり戦略的に動かしていくことが必要かなという示唆もあったかと思います。最後に蓑田さんいかがですか。

○一般財団法人 100万人のクラシックライブ 蓑田氏

ありがとうございます。先ほどご説明したように我々の活動というのは、ほとんど全てが企業、あるいは団体、自治体と一緒にやっているわけですし、延べ200や300の企業や団体と一緒にこの活動をやっています。逆に言うと我々自分だけでできるということは一つもないということだと思います。

いまおっしゃっておられるテーマに限って言うと、どんな人に聞いても、どんな企業に聞いても楽しい街を作りませんか、もっと賑わいのある街にしませんかと言って、ノーと言う人はいないですね。つまり、総論は全員賛成なんです。何で各論に入ったときに難しくなるかという彼らは何をやったらいいかわからないということだと僕は思っています。自治体にしろ、あるいは企業にしろSDGsやESG、あるいはCSRだと、様々いまでも何年も何年も言われ、私も実業界に長く身を置いていましたから、もうそういう言葉が溢れているわけですが、具体的に何をやったらSDGsなのか、サステナビリティは何かということになると、途端に各論になるとわからないというのが本音だと思います。その本音に対して僕らはこういうことをやりたいというふうに先ほど林さんもおっしゃっていましたが、何をやろうとしているのかということを確認して「一つのソリューションになるんです」というふうに証明ができれば良い。それはデータかもしれないし、実績かもしれない。あるいは、そのコンセプトに賛同するというのもかもしれません。様々な理由はありますが、どこかで引っかかって一緒にやろうということになっているから、900回のコンサートを全国の人たちが取材してくれるわけです。

ですから、これはトップから本当に末端の担当の方に至るまで、本当にそこに納得感がなければやらないのだけれども、逆に言うとそれをやらなかったら他にやることあるのかということとそうでもないというのがたぶんいまの世の中の日本の現状だと思っておりますので、「こういうソリューションがあるよ」「こういうことをやれば社会的にも認知されるし、あるいはこれで本当に世の中の役に立つんだ」というのをいかに紹介していくということは非常に大事なだろうと私は思っています。

○大西政策参与

蓑田さん、ありがとうございました。本当に戦略ですよ。戦略を持って、どういうソリューションがあるのか、リソースがあるのかということとちゃんと見せていく、言語化していく、可視化していくという取組なのかなと思いました湯浅さん、良かったら話を受けてコメントしていただければ。

○湯浅氏

どうやっていろんな人たちを巻き込むか。上手に SOS を出して、「こいつを助けてやろう、手伝ってやろう」という気になってもらうことですよと言えたらカッコいいけれども、実際はそうではなくて、暑苦しく押しつけるみたいな、「なんでやらないの」というそういう感じでやってきてしまいましたね。個人的には反省しております。ですけれども、ただいま関わっていることについて言うと、やはりコンテンツの力はとても大きいなと思っていて、そうしなくてもいろいろ関わろうと思ってくれる人たちが出てくるというのは、何か暑苦しく言わなくても、やはりコンテンツの力を引き付けてくれる求心力というのがそれを上回っていると思っていてすごく大きなことだと思います。ただそのときに、養田さんがわからないと言ったけれども、それは双方にあって、こども食堂の運営者の人たちも企業の事がわからないし、企業も子ども食堂のことはわからないし、やはり見合ってしまうとか、遠慮してしまうというか、企業さんからするとこんなことをやったらご迷惑なのではないかと思うし、こども食堂の側からするとこんなこと頼んでいいだろうかと思うし、みたいな感じで見合っていますよね。そのときに思うのはやはりわからないということに加えて、面倒くさいんですよ。やはり異文化の人たちとそもそも見ている世界も違うし、使ってきた言葉も違うし、どうしたいかということも違う中でお互いの期待値や実際の事業の内容、プロジェクトの内容まで含めて「これでいきましょう」と合意するのは、こども食堂の人たち同士で話すことに比べたらもう何倍も手間がかかるんですよ。その何倍も手間がかかることを、やはりやる必要があるんだと思うかどうかというのは、こども食堂の運営者によっても違いが生まれることもあるし、企業さんの中でも違いが生まれることがあるし、「自分たちが言ってきたならこういうことをやらないんだったらじゃあいいです」みたいな会社さんもあれば、「一緒に考えましょう」と言ってくれる会社さんもある。子ども食堂側も同じ。ですので、「わからないし面倒くさいけれど、わからなくて面倒くさいことを乗り越えても一緒にやろう、やる必要があるんだ」という意思が最後は物を言うかなというのはもちろん、工夫もいろいろ必要だけれど、やはり意思が大きいかなと思います。

○大西政策参与

ありがとうございます。意思是すごく大事ですよ。これは市民活動でもそうですし、企業活動でもそうですし、たぶん思いみたいなものかもしれない。それはもうちょっと合理的な部分もあるのかどっちもなのか。

○湯浅氏

社会的に必要だという自分の納得感みたいなものだなと思いますね。これはやっぱり必要だとは思いますが、どう考えてもという。その感じはいろいろ面倒くさいこともあるけれど、能力という感じではないかな。

○大西政策参与

ありがとうございます。ここまで聞いて、室長はいかがですか。

○山本室長

他の団体をどうやって巻き込んでいくかということですが、たぶん2通りのやり方があって、一つは増田さんがおっしゃったように、「この人を支えていくには、何をやっていったらいいだろうか」という発想で考えていくことです。それから二つ目は、林さんがおっしゃったように「あなたにとってメリットがあるでしょ」というこういうやり方だと思いますね。連携先の方にとって

も、人と人とのつながりを作るということによってかなり多くのメリットがあるだろうと思っています。

人と人とのつながりというのはある意味で魔法の言葉ということですが、かなり普遍性のあるいろんな方々に関係のある言葉だろうと思っていますので、孤独・孤立対策と言わずとも、「あの人とのつながりを緩やかにしていこう。そうするとこの業界の人にもこういうメリットがあります。こういう人にもこういうメリットがあります」ということが言えると思います。そのためには様々なそうした観点から、うまく連携している事例、ソリューションの事例をいろんな方に知っていただくということが大変重要でありまして、今日この関連イベントで皆様に出ていただいているのはその趣旨の一環でもあります。

まだ全国にもいろんな形で活動されている事例があると思いますので、そういうものを月間活動を通じて広くみんなで共有していけたらと思っています。以上です。

○大西政策参与

ありがとうございます。締めコメントみたいなところでそのまま締めてしまおうかなと思いつつも、まだ質疑をぜひ受けたいなというのも、あと5分しかないので1人か2人かでこの方というふうにご指名いただけると嬉しいと思っているのですが、質疑をいただけたらということで良いですか。

○荒川参事官補佐

質問がある方は挙手ボタンを使ってお願いいたします。

○大西政策参与

なかなか挙げにくいこともあるかもしれませんが、また後日お問い合わせいただいたら対応できるものもあると思いますので、遠慮なくお問い合わせいただけたらと思います。

ちょっと時間も迫ってまいりましたので少しまとめをしたいと思います。あと5分でまとめられるようにしたいと思います。

たくさんいろんな話が出ました。孤独・孤立対策としてのつながり作りはちょっと抽象度の高いテーマでもあったのですが、地域で様々な分野で活動されているような皆様とパネリストの2人含めてお話ができたかと思います。最後にぜひ皆様に一言ずつコメントをもらって終わりたいと思います。今日は全国版の官民連携プラットフォームにご参加いただいている皆さんが来てくれています。ぜひ皆さんへのメッセージといいますか、こういうことを伝えたいとか、最後にこういうことを言いたいとか、別に一緒にコラボしましょうみたいなそういうことでもいいですし、いやいや最後に自分たちはこういう活動が大事だと思うからこういう活動をしましょうみたいなもの、エールでもいいですしぜひ一言、順番にいただけたらと思っています。養田さんお願いします。

○一般財団法人 100万人のクラシックライブ 養田氏

私の方から簡単に申し上げます。100万人のクラシックライブは全国でやっております。本当に様々な目的のためにももちろんやっていますが、こういう機会を通じて本当に孤独・孤立のような問題について、使っていただけるツールになればいいと思っています。回数はこれから何千回というふうに、年間何千回も増えてきますので、また皆さんのところにお伺いして、いろいろとお話をさせていただきたいと思っています。今日はどうもありがとうございました。

○大西政策参与

林さん、よろしくお願いします。

○一般社団法人 ArtsAlive 林氏

アートトリップもいま全国展開をしています。私達の最初のフィールドは美術館、それから介護施設、病院ということですが、最近は企業の中でもウェルビーイング経営というようなことでもお役に立っているのかなと思いますし、あと学校もやはり孤独・孤立化する生徒がいる。そういう孤独・孤立化する生徒もアートの前では全ての人々が平等だというのは私の信念でございますので、ぜひそういうアートを通して皆さんが自由に会話ができる、そういう社会を日本の隅々まで作っていきたいと思っておりますので、またオンラインでも月に3回、毎月実施しておりますので、「アートトリップってどんなプログラムなのかな」「そんな温泉に入ったような効果があるアートってどんなのかな」と思ってくださった方はぜひオンラインのプログラムでも、また全国の様々なところでも実施しておりますので、私どものウェブサイト等ご覧いただいて、ご参加していただけたらと思います。また孤独・孤立に関しても昨年からですが、認知症とかそういったものに加えて、私どもの事業の大きな柱となっておりまして、これからは引き続きこの5月には強化月間ということですので、昨年お世話になった方々も巻き込んで、また継続できるように頑張っていきたいと思っております。ありがとうございました。

○大西政策参与

ありがとうございます。増田さん、よろしくお願いします。

○NP0 法人クラブしっきーず 増田氏

しっきーずがやっていることをなんでこうできるのかなといま考えていくと、半歩ずつ出し合っているからできるのではないかなと。しっきーずがやってこうやろうではないし、でも街がこうやってくださいではなくて、お互いにできることを半歩ずつ出し合うから衝突しないでできていることはいつも大切にしていることですし、チームでやってることはすごく特別なことではなくて、全国どこ行ってもあるお寺だったり、神社だったり、河川敷だったり、公園だったり、その地域にあるものをいつも探してやっているからできることなので、しっきーずがやっていることというのは全国どこでもできるのではないかなと最近は思っています。そして、スライドとか画面に先ほどから出ていたのが、うちの代表の母です。母が今日ここに来ることが可能になったのも、対策室の皆さんに「行っていいですか」と言って、「じゃあ席をこうしてできますよ」とこれも出しあったから可能になったことなのではないかなと思います。ありがとうございました。

○大西政策参与

ありがとうございました。駒井さん、締めコメントをお願いします。

○イオンリテール株式会社 駒井氏

本日はありがとうございました。本当にこのような場に参加させていただいて、本当に嬉しく思っております。まず一度、我々のWebサイトへMySCUEと入れていただければ入れますので一度遊びに行っていただけたらと思います。いいなと思ったら無料でございますので、会員登録もしていただければ幸いです。本日はありがとうございました。

○大西政策参与

ありがとうございます。ではパネリストのお二人、湯浅さんからお願いします。

○湯浅氏

ありがとうございました。今日ご登壇の皆さんももちろんですけど、事例の収集をやると掛け算の話をしましたけれど、そういう取組はたくさんあってノウハウがたくさん集積されているのだと思います。

でも、まだ一方ではどういうふうにしたらそれができるかわからないという人たちもいるということなので、ナレッジを可視化したり、ある種の調査研究事業的なもので整理したり、何かできるともしたしたらいろんなところがもうちょっと進むのかなと思ったりしたので、考えてみたいと思います。ありがとうございました。

○大西政策参与

ありがとうございました。では室長お願いします。

○山本室長

最後に一言だけ申し上げたいと思います。登壇者の皆様、そしてパネリストの湯浅さん、そしてファシリテーターの大西さん、どうもありがとうございました。私自身は孤独・孤立対策を担当しており、実はとても楽しく毎日仕事をしております。皆様も楽しく、他団体と繋がり、そしてご自身が活動を発展させられることを願ひまして、今回御礼の言葉とさせていただきます。どうもありがとうございました。

○大西政策参与

ありがとうございました。僕もコメントしようかなと思いますけれど、今回いろんな方のお話を聞いていてすごく思ったことは、つながり作りは掛け算の話とかいろんなメニューがあるとかいろんなテーマがあったのですけれど、何でもできるし、たぶん何でもあるのですよね。一方で、共通の戦略だったりキーワードだったり、工夫がある。これは我々だけではなくて、今日ご覧になられている皆さんもたぶんいろんな実践や事例があって工夫があって、せっきくのプラットフォームなので、300団体、400団体の方がこれだけ集まってくれていて、もっと今後増えるかもしれないのでその集積の中から見えてくるものを見つけていくということが次のステップなのかなということと、たぶん政府の強みとしてはそういったものを上手に抽出しながら、多くの方が活動を広げられるような支援をしていくということが必要なのかなということを改めて思いましたし、ぜひプラットフォームの会員同士の連携や交流等の機会とかも、来年度以降も含めていろいろ考えていきたいなと思いますので引き続きよろしくをお願いします。

幹事団体の皆さんから本当はお言葉をもらいたいぐらいですけど、それはまた別の機会にいただけたらなと思います。以上で、ディスカッションパートを終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

○荒川参事官補佐

それでは以上をもちまして本日のプログラムは終了となります。モデレーターの大西政策参与、登壇者の皆様、そしてご出席の皆様、本日はありがとうございました。最後に皆様に四つご案内がございます。1点目ですが先ほどの質問コーナーに質問できなかったという方もいらっしゃるかと思いますので、ご質問があれば事務局にメールでいただけますと幸いです。

そして先ほど湯浅様からナレッジを共有できたらというお話もございましたけれども、山本室長が途中で申しあげました通り、我々の方で作成しております月間のホームページで、各団体様の取組を紹介させていただいております。こちら全国で多様な取組をなるべく多くご紹介できればと思っておりますので、今募集中ですのでぜひ登録の方よろしくをお願いいたします。

三つ目です。本日の内容につきましては、追って孤独・孤立対策担当室の YouTube チャンネルでアーカイブ配信させていただきますので、よろしければ皆様の身の回りの方にもご視聴を説明していただけますと幸いです。

最後に、今後の企画の参考のため、アンケートにご協力いただけますと幸いです。アンケートは、現在画面投影しております QR コードを読み取ることでご回答いただけます。またご出席いただきました皆様には後ほどメールでのご連絡させていただきますので、皆様のご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

それでは、以上をもちまして、令和 5 年度通常総会関連イベントを終了させていただきます。本日は長時間にわたりご出席誠にありがとうございました。